



マクヒュー／スラヴニー 現代精神医学 第二版

ポール・マクヒュー，フィリップ・スラヴニー著
澤 明 監訳

本書は、ジョンズ・ホプキンス大学名誉教授 Paul R McHugh と Phillip R Slavney による『The Perspectives of Psychiatry, 2 ed』(1998)の邦訳である。本書は、刊行以来米国の精神医学界では、精神医学を深く学ぶ人たちにとっての必読の書とされている文字通り洛陽の紙価を高めた名著で、評者は、1998年の刊行時、本書を精読し、米国では数少ないドイツ語・フランス語圏内の精神医学思想を視野におきながらの著書で、その内容の緻密さと発想の豊かさに影響を受け、自らの論文にも早速に引用し、また周囲の人たちには是非本書を読むように強く推薦したものである。もし本書が邦訳され、精神医学を専攻する人たちの目に留まれば、日本の精神医学ももっと深みと多様性を増してくるだろうとひそかに思っていたが、このたび、澤明さんやその門下生たちの共訳により本書が刊行されることになり、快哉を叫んだものである。

著者によると、本書の第1版(1983年)は、同大学の精神医学の教育・研究において、精神科医が診断や治療を行ううえでの基礎をなす根拠や原理を概説することを主としたが、刊行後のコメント・批判を受けて、第2版では、精神医学的考え方をさらに詳述することにしたという。個々の精神疾患の定義や最新の治療法を述べるのではなく、精神科医が精神障害の診断に到達し治療の確信を得るにとって根本的な考え方の構造を検討す

ることを目的とすることが繰り返し語られる。

米国に限らないが、学生からしばしば出される主要な質問に、1)精神医学は何を対象とするのか、2)精神という生態システムについて信頼性のある評価ができるのか、その評価には妥当性を求めることができるのか、3)いかに脳は精神を生み出すのか、という3つの問いがあるが、本書は、まさにその質問に応えることを主題としている。

さらに、現代の精神医学には、2つの大きな問題があると著者は言う。1つは、「こころ・脳問題(Mind-brain problem)」であり、2つは、精神医学の歴史の中に露わになってきた精神医学思想の「党派性(Factionalis)による混乱状況」である。本書では、この2つの大問題を解決するために、精神医学における4つのもの見方を提出する。

とりわけ、この「党派性」について言えば、1) 18世紀のピネル以来の、科学や技術における実践的方法の隆盛、権威主義に対する疑問、合理主義への関心、非人道的社会からの解放などを主とし、心理学では、ヴント、ビネー、精神医学ではクレペリン、プロイラー、マイヤーに代表される近代主義、2)近代主義の基礎にある啓蒙主義や合理主義を否定したニーチェの影響を受け、精神障害は怒り、憤り、罪悪感、葛藤などの心理学的感情・情動から生じ、個々の患者自身の意図とその現実との衝突に当悪した葛藤の所産であり、記述的精神医学では捉えることのできない個々人に固

有の心理的葛藤の探求が必要であることを主張したフロイトに代表されるポストモダニズム、3)近代主義・ポストモダニズムによるそれぞれの精神科医や彼らの舞台である施設が個々の精神障害者と称される人間の自由を奪ったとする、「精神病の神話」の著者であるサスにみる反近代原理主義(一般には、反精神医学と主される)の三つの党派的精神医学であると述べている。一方で、このような近代主義・ポストモダニズム・反近代原理主義を統合する試みが歴史的にもなされており、その偉大な試みがヤスパースによってなされたとする。

ちなみに、著者も述べているように、本書の記述や説明で、ヤスパースの影響が強く感じられる。評者は、マクヒューは、ドイツ精神医学のなかでも、とくにヤスパースに学ぶことが多かったと考えている。マクヒューが、米国におけるヤスパースの『精神病理学総論、第7版』英訳本(Hoenig J & Hamilton M 訳, 1963年)の再版本(1997年)で、序文を書いていることにも、彼のヤスパースへの傾倒が窺われる。

著者は、「こころ・脳問題」と「党派性による混乱問題」の2つの問題を解決するために、そして、合理的な治療が依拠する精神症状の記述とその発生の説明がどのように結びついているのかを知るために、あるいは精神障害は「異なった環境における人生」でもあるということを理解するために、患者の人生は、1)患者は何を「もっている」のか(疾患)、2)患者は生来何で「ある」のか(特質)、3)患者は何を「行う」のか(行動)、4)患者は何に「直面」してきたのか(生活史)の4つの側面において変化していくものであると強調する。

本書全体の9割以上を占める、「疾患の観点か

らの概念」、「特質の観点からの概念」、「行動の観点からの概念」、「生活史の観点からの概念」の記述から学ぶことは多い。膨大な論述を要約することは難しいが、そこにみる具体的な記述や説明・解釈の論理など、関心をもたれる読者には、是非、本文のこれらの章を熟読してほしい。

この4つの視点を臨床的に応用して分かったことは、「DSM-III」やエンゲル(1980)によって提唱された「生物・心理・社会モデル」の思想を否定したこと、それぞれの観点に立つ治療の有用性と限界を明らかにしたこと、精神医学を周辺の科学や他の臨床医学分野へのつながりを鮮明にしたことであった。とくに、治療との関連でいえば、疾患の視点では薬物療法と、特質の視点では心理学的多様性をもった特質の脆弱性に対する指導と、行動の視点では障害された行動への抵抗への手助けと、生活史の視点では異常とされた過去の出来事の説明とその修正とに、治療の主眼をあてることが指摘されている。

澤明さんとその門下生たちの訳文は、時間をかけたこともあって、大変こなれたものになっている。用語に関しては疑問なしとしない訳語もみられるが、それは些末なことであって、全体の文章としては非常に見事な訳であると評していい。内容的には、精神科医になって2、3年の臨床経験を経た若手医師、あるいは、さらに長い臨床や研究の経験を経て、自らの経験を歴史的な変遷を経てきた種々の精神医学の思想に位置づけたいと思っている精神科医にとって有用であり、必読の書、座右の書になるに違いないと評者は信じて疑わない。

松下 正明(東京大学名誉教授)